CONSERVATION VOLUNTEERS Vol. 24

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）

報告____　「集落存続」の想いを込めた平榎櫟山見晴台づくり　p2
福岡県森林づくり活動安全講習会　p4
リーダートレーニング研究会2020 online報告（第２，３回）
第２回　災害時に求められる農業ボランティア　p5
第３回　安全管理の意識を育てる事故事例研究　p6
連載____　LFC　現場に学び、互いに学ぶ半農小学生とおとなたち　p7
総会報告　p7

会員報告

■はじめに

朝廣和夫　（JCVN理事長／九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門）

皆様、コロナ禍をいかがお過ごしでしょうか。「環境保全の催しを中止せざるをえなくなった」「感染対策を行い、規模を縮小して実施できた」など、様々な工夫をされて過ごされてきたのではないでしょうか。私自身を振り返りますと、現地への移動も、作業も、少人数で、短時間に活動することが多くなりました。その分、活動は濃密な時間になったように思います。

一方、増加したのはオンラインの催しや会議です。学会や、NPOのシンポジウム、また、海外でのワークショップも全てオンライン化されました。交通費や宿泊費がかからず、時間も節約できるのはメリットです。ただ、参加者と会話をしたり現場を見ることもないので、本当にこれで良いのか、どうも腑に落ちません。

そもそも、感染症との戦いは古くから行われてきました。近代以前の暮らし方に目を向ければ、大声で話さない作法、集落の分散配置など、今思えば、感染症対策も兼ねていたのではと思われます。そのような目線で、もう一度、昔のモノ・コトに目を向け、一考してみると新しい発見があるかもしれません。人との出会いは、やはり大切です。マスク、手指消毒、新しいマナーを身につけ、次のステップに移りたいところです。

さて、本紙面では、会員からの報告として、今年３月に行った福岡県朝倉市志波平榎地区での復興植樹祭、福岡県森林づくり活動安全講習会についてご紹介します。また、昨年度の第２，３回のオンラインLT研究会の報告、連載、総会報告など充実した内容となっております。

皆様のご安全をお祈りし、今後とも、よろしくお願いいたします。

■「集落存続」の想いを込めた平榎櫟山見晴台づくり

朝廣　和夫（JCVN 理事長／九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門）

「豪雨を受けた集落が、どのように復旧・復興を進められるのか」。その多くは、被害の程度に大きな影響を受けるように見受けられます。多くの集落は、発災時に被害は受けたけれども、地域の互助や外部の共助、そして、公共事業の手も借りながら数年を経て復興を成し遂げているように見受けられます。一方で、被害の規模が大きかった集落では、集落を閉じる決断をしたり、人命と多くの資産が失われたことで元には戻らない集落も少なくありません。

ここで紹介する福岡県朝倉市志波地区にある平榎集落は、2017 年 7 月九州北部豪雨で約 1,000mm/日の雨に見舞われ、川沿いの多くの家が流されました。結果的に、災害前 37 軒あった世帯数が 18 軒（50%）減少したのです。本日は、この集落の見晴台づくりを通じた復興の取組みをご紹介したいと思います。

■ 花木の植栽による住民の集いの場を

平榎は平家の落人の里と言われ、山岳信仰のある英彦山のふもとに所在する柿の生産を主とする谷地形の風景が広がる集落です。地質が花崗岩のため、その風化した土壌が豪雨により谷という谷がほとんど地滑りを起こし、かろうじて柿園地の斜面下の集落は被害を免れました。柿園にある権現様、尾根部の秋葉神社等、古い社の多くは被害を免れており、村が長い年月を経て今の佇まいに至っていると言えます。

集落の復興委員会は、2019 年 4 月に結成され、ご高齢の住民から「集落に花木を植栽し復興を進めよう」という提案があったそうです。しかしながら、委員会を構成する世代（65 歳前後）は「花木を植えたら管理が必要になる。あちこちに植えられたら大変だ」「俺たちだけで考えても案が出ないので、外部に協力を頼もう」ということになったそうです。その協力は、九州大学復興支援団にもたらされ、工学部の三谷教授、農学部の佐藤教授、藤原准教授、そして、芸術工学部の私から支援の申し出を行いました。「植栽で復興したい」これま、まさに、環境保全活動のノウハウが貢献する場と考えました。なお、「なぜ、花木の植栽が、集落の復興につながるのか」「なぜ、集落の方々は、このような考えに至ったのか」。この点は、活動の中で徐々に理解が進みました。

■ 耕作できない柿園を見晴台へ

平榎の生活基盤である柿生産規模は災害前の 9.0ha から 6.0ha と大きく減少することになりました。河川の増水や土砂崩れをまともに受けた園地に加え、数年かかる復旧工事の影響で管理のできない園地も含まれます。今回の敷地は、後者に該当し、復興委員会は園主から 20 アールの土地を借り受け、農地から外し、柿を伐採し、花木を見晴台として植栽することとしたのです。

2020 年度に一連の活動を実施するため、国土緑化推進機構の緑と水の森林ファンドに「2017 年九州北部豪雨後の景観づくりによるコミュニティ再生」として申請・採択され、植栽活動を進めることができました。

■ 会合、祭り、作業、そして計画・設計

実施に当たっては、様々な共同作業、また、大学としての調査研究、および、計画・設計・創作活動を実施しました。約２カ月に１回の復興委員会の会合で話し合いを進めます。委員会の主な議題の中で特徴的だったのは「集落を他出した世帯との協働」でした。家屋を失い集落を出ざるを得なかった住民との集いの場づくりです。また、復興委員会の委員のみでなく、集落の住民との協働、そして、九大など外部との協働、このような複数の関係者との関りを選択肢としながら、活動の検討が行われました。

この集落の伝統行事には、夏の「よど」、秋の鬼行事、おくんち、そして正月の鎮火祭です。「よど」、では、火の神様が祭られている秋葉神社で花火をあげ、鬼行事では、鬼が各家を訪問します。年末には餅をつき、と小さな集落ですが実に様々なお祭りが残っています。外部者へ参加の輪を広げたことは、新しい試みです。

もう一つ、新たに実施した特徴的な活動は、柿園の秋の紅葉観察会です。概ね柿の実の収穫を終えた 11 月末、柿の葉は美しい橙色に紅葉します。緑の草と青い空の間に、それは美しい風景が広がりました。

さて、私たちは、このような活動に参画しながら、見晴台計画地の草刈、柿の伐採作業、そ

して、測量、植栽木の樹種選定、配植プランを検討し、模型、図面類を作成しました。植栽木の準備は、ファンドによる購入に加え、集落の住民等からの寄付として、苗木の持ち寄りを行いました。

樹種選定では、柿生産地の事情により、カメムシがつく樹木はＮＧとのこと。その他、四季折々に花や紅葉を楽しめる、シカの食害に強い、尾根部は崩れそうな箇所もあるため根の張りの良い樹種などの条件を踏まえ、サクラの類、イチョウ、ミズキの類、サルスベリ、イロハモミジ、ツツジ、アジサイとしました。

また、大学では、これらの経緯を見晴台への来訪者に伝えるため、学内の工作工房でステンレス鋼を加工し、説明版、および、サインを手作りし、現地に設置を行いました。

■ 平榎復興植樹祭

約２年をかけた集大成として、2021 年 3 月 6 日に復興植樹祭を開催しました。平榎区民、そして旧区民、さらに復興支援団体、あさ・くるにより杷木小学校の児童および父兄の参加も得られました。この団体は、この日のために「あさくる」という曲を作詞作曲し、子供たちのカリンバ演奏を当日披露しました。YouTube で公開されていますので、ぜひ、拝聴ください。

前日まで雨続きの天候でしたが、当日は晴天に恵まれ参加者全員で記念樹の植栽を行い盛況に終えることができました。

■ 見晴台づくりという復興への歩み

復興委員会の委員長であるＨ氏は、報告書で次のように経緯を書かれています。

『今までの自然豊かな村、人と人とのコミュニケーションは戻ってきません。「集落を守らなければ」、（中略）「花を植え明るい集落を」等の住民の思いから復興委員会を立ち上げ（中略）集落のシンボルとなる見晴台と景観づくりを全員の協力で進めてきました。（中略）これからも新しい地域づくりに挑戦し、いつでも、誰でも、どこからでも来られて住みたくなるような所にしたいのでご支援をよろしくお願いいたします。』

復興の槌音は今も続いています。このような動きができている集落は、実は、多くはありません。それは、私共の関り云々ではなく、集落住民の連帯力、その大切さを改めて感じました。

2021 年度からは、あさ・くるの協力により、「平榎の郷守り会」を組織し、福岡県のふくおか地域貢献活動サポート事業の支援を受け、杷木小学校の子供たちと住民の交流活動が展開されています。今後も寄り添いながら、植栽した樹木の成長と集落の復興を支援してきたいと考えています。

（参考文献）
平榎復興委員会：平成 29 年 7 月九州北部豪雨後の景観づくりによるコミュニティ再生事業実施報告書：令和３年４月

■福岡県森林づくり活動安全講習会

小森耕太（JCVN理事／認定NPO法人山村塾理事長）

山村塾は、福岡県からの委託を受けて、「福岡県森林づくり活動安全講習会」の企画運営を担当しています。講習会では、森林づくりに取り組む団体や個人の方々が、安全な森林整備の技術や知識を身につけて実践できることを目指しており、森林環境税を活用した「福岡県森林づくり活動公募事業」の実施団体をはじめとした様々な方々が受講されています。

スタートした当初は、県職員の林業普及指導員さんが実施していましたが、より現場に近い形で実施できるようにと、平成 22 年度から一部の専門的な講習会（チェーンソーによる伐木造材）、平成 26 年度からは講習会全体が山村塾に委託されるようになりました。

毎年、担当者間で振り返りを行い、受講者ニーズや必要な事項を反映させてバージョンアップしてきました。令和 3 年度は、感染症対策のため、定員を各 15 名にしぼり（オンラインは 20 名）、全 11 回が予定・実施されています。

＜R3 福岡県森林づくり活動安全講習会日程表＞

講座名		R3 日程	時間
基礎講座	森林管理と安全作業 @オンライン	5/30(日) 6/6(日)	2.5h ×2
	〃　@飯塚市	7/16(金)	5h
	〃　@福岡市	7/14(水)	5h
手道具基礎編	手道具による下草刈り	7/3(土)	5.5h
	手道具による間伐	10/16(土)	5.5h
	竹林整備@八女	10/23(土)	5.5h
	竹林整備@北九州	12/4(土)	5.5h
動力編	刈払機の取り扱い	6/26(土)	5.5h
	チェーンソーの 取り扱い A 日程	11/3(水)	5.5h
	〃　B 日程	12/11(土)	5.5h
上級者研修	チェーンソーによる 伐木造材	1/22(土) 1/23(日)	6.5h ×2

最近の傾向として、地域の森林や緑地を整備する自治会関係や福祉・保育施設など新たに森林づくりに取り組みだした組織が増えてきた印象があります。また、林野庁の森林・山村多面的機能発揮対策交付金事業を実施してきた団体が、事業継続のために公募事業に応募するケースもあるようです。そして年々増えつつあるのが、団体に所属せずに個人で実家の竹林や森林を整備したいと考えている方々です。

人気があるのは、チェーンソーや刈払機の取り扱い、次いで竹林整備です。効率よく作業成果を求めると、やはり機械を使いたくなるのでしょう。竹林整備の講習会は、高級タケノコで有名な合馬地区でモウソウチク林の整備、そして八女市黒木町で山村塾が管理するマダケ林の整備の 2 か所で実施しています。定員割れを起こしがちなのは、手道具による「下草刈り」、「間伐」です。かつては森林づくり活動の王道でしたが、植林が減ってきたことと樹木が大きくなって手ノコでは大変になっているからかもしれません。できればエンジン音のない、仲間とおしゃべりしながらの作業も大切にされたらなぁと思っているのですが･･･。

公募事業実施団体が受講を義務付けられている「基礎講座」は、森林ボランティアの概論的な話に始まり、JCVN の研修でもおなじみの安全管理、リスクアセスメントなどを実施しています。本当は、リーダーシップやコミュニケーションといったメニューも加えたいのですが、応急手当の実習など他メニューを優先しており、やや駆け足感があります。また、今年からオンラインを追加しましたが、Zoom ミーティングを使用してのグループ討議、ペットボトルを使用した心肺蘇生法実技など、思いのほかスムーズに濃い内容で実施できてほっとしました。

＜基礎講座の時間割＞

時間	内容
10:00	オリエンテーション、自己紹介、アイスブレイク
10:35	森林の働き、森林づくり活動事例
11:15	安全管理(RM/リスクマネジメント)
12:00	お昼休み
13:00	森林作業の事故事例、感染症への対策
13:20	ケガの応急手当① 止血、動植物、救急箱
13:40	リスクアセスメント(RA、危険評価)(休憩含む)
14:35	ケガの応急手当② 心肺蘇生法、AED
15:45	質疑応答
16:00	閉会

これらの講座メニューは、自団体の活動に誰でも気軽に参加できるよう取り組んできた運営ノウハウの蓄積と JCVN はじめとした他団体との連携を継続してきたことが下支えになっています。「だれもが気軽に、安全で楽しい」活動が広がることを期待し、今後も取り組みを継続したいと思います！

※講座情報は山村塾 HP（https://sansonjuku.com/）

リーダートレーニング研究会2020 online報告（第２，３回）

第２回　災害時に求められる農業ボランティア（2020年11月12日　19～21時）

朝廣　和夫（JCVN 理事長／九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門）

第二回の研究会では、災害時の農業ボランティアをテーマとし、「NPO 法人がんばりよるよ星野村」理事長の山口聖一氏をお招きし、前半に活動紹介、後半は、朝廣の方で公開している「災害後の農地復旧のための共助支援の手引き」を紹介し議論を行いました。農業ボランティアとは、災害時に被災した農家の農地、水路等の復旧支援を行う活動で、「生業支援」であることが特徴です。一般的な災害ボランティアセンターは実施しておらず、各地の JA、NPO、行政等の団体等が連携し実施しています。

■「NPO 法人がんばりよるよ星野村」活動背景

2012 年 7 月九州北部豪雨の際に星野村災害ボランティアセンターとして設立し、後に NPO 法人化し今日まで、星野村のまちづくり、また、近隣の災害があった時のボランティア派遣、支援を実施してきました。本日は「災害時に求められる農業ボランティア」という題でお話しさせていただきます。

一般ボランティアセンターとの違いについて、一般ボラセンは生活支援の終了と共に早期に閉所されますが、農ボラは長期の取組みが必要となります。また、農業、施設に応じた対応が必要で、専門的知識を有したリーダーが必要となります。ここで、農ボラが必要とされた背景を考えたいと思います。（報告なので箇条書きでまとめてみます。）

- 豪雨時、星野村は孤立したため、サテライトセンターが開設されましたが８月末に閉所されました。しかしながら、茶園、田んぼ等が全く手つかずになっており、ボランティアから「これで良いのか」という声が上がっていました。
- 高齢の営農者が多く、農地の被害で営農ができなくなったことにより健康被害者、離農者が続出しました。
- 10 月ごろには稲刈りのニーズが多く出され対応が増えました。
- 地元の土建業者は公共事業復旧に手いっぱいで、個人の被災に対応する余裕がない状況にありました。2013 年 3 月の災害査定後も入札に時間がかかり、やはり、農ボラへとの声もありました。工事の影響は、２年目、３年目で護岸工事が終了後、農地の砂利拾いを農ボラで支援する作業も出てきて、活動は長期にわたりました。
- 農地の被害は生計へ影響し、早期復旧が要求されました。また、契約農家は数年後の復旧後に販路を失う事例もありました。

■星野村での活動の取組み

2012 年 8～10 月は個人で被災地を回りニーズの把握をし、ボラセンの窓口になってほしいと、JA、観光協会、商工会議所を巡りましたが、「気持ちはわかるが人がいない」ということで、10 月中旬、八女市星野支所の理解を得て 11 月からセンターを立ち上げました。ボランティアの継続性について、当初は１～２年で終わるだろうと考えていましたが、上述したように、続けながら長くかかることが見えてきました。

■活動と共に

その後も災害は続き、2017 年 7 月九州北部豪雨では福岡県朝倉市の専業農家を対象に家屋の泥出しから営農開始まで支援を継続しました。また、令和２年７月豪雨では、大牟田市と連携し「大牟田市農業災害ボランティアサポート協議会」に協力し、現地の活動を展開しました。ここでは、最初の８月の活動に被災した農家に見学してもらい理解を広げました。

今後に向けた課題と対応について、農業被害の多様性に対し、公共的な農業ボランティアセンターの開設、行政との連携、農業ボランティアリーダーの育成について、その必要性を指摘いただきました。

第３回　安全管理の意識を育てる事故事例研究（2020年11月26日　19～21時）

志賀　壮史（JCVN理事／NPO法人グリーンシティ福岡理事）

リーダートレーニング研究会 2020 online の第３回のテーマは「事故事例研究」。進行は理事の志賀が担当しました。

ネットニュースやテレビで野外活動、ボランティア、アウトドアレジャー等の事故についての報道を目にすることがあります。日頃から、自分たちの活動分野に関係する事故事例を収集しておくことは、安全管理の意識を育てていくことにつながります。

それら収集した事故事例を取り上げ、じっくり考えることで対策や教訓を得ようというのが「事故事例研究」です。

この日の参加者はJCVN理事も含めて１０名。まずは自己紹介を兼ねて、それぞれのヒヤリハット体験を出し合いました。

その上で事故事例研究の進め方についての説明。まずは、ある一つの事故を取り上げ、ニュース記事や（あれば）事故調査報告書などを読むことから始めます。続いて次の三つの段階を踏んで意見出しをします。

１）**事実と確認できること**：報道記事やその他の情報源で確認できる事実を列挙します。
２）**推測・判断できること**：それらから推測できることや考えられる可能性を挙げます。
３）**得られる対策や教訓**：自団体や自分自身にできる対策や得られた教訓を整理します。

段階を踏んで意見を出し整理していくことで、感情的な悪者探しや性急な解決策に飛びつくことを避け、事実に基づいて具体的な対策を立てていこうとするものです。

事故事例研究の一つ目のケースとして、2019年、地域の草刈りボランティアで起きた男児の水難事故を取り上げました（ここでは事故の詳細は省きます）。

報道内容から事実として確認できたのは、草刈り活動の開始から救急要請、救助から搬送までの時刻、活動の参加者数、Google マップから周辺環境の様子、参加者募集チラシの PDF などです。

続いて、推測・判断できることとして、

・近隣にショッピングモールがあるので、まあまあ街中な環境。
・ライフジャケットは装着していなかった様子。
・男児が１人で歩いていた。周囲が声をかけなかったのは顔見知りではなかったから？
・広くない範囲に 40 名の参加者。距離は近い。男児は端の方にいたんじゃないか？

といったことが挙げられました。

最後にこれらを受けて私たちができる対策や得られた教訓として、

・参加者の年齢制限を行う。
・「お子さんから目を離さないで」の声がけ。
・立ち入り禁止区域を決め、パイロンやトラロープ等で明示する。
・刈払機は声が聞こえないので、作業をしない見張り役を立てる。
・当日参加者の名簿に名前を書いてもらう。

などの意見が出ました。参加者層や作業内容によって変わりますが、いずれも具体的で効果のある対策ではないでしょうか？進行役からは補足として、集落の共同作業など顔見知りの多い活動と、新規住民の多い地域での活動やボランティア活動では必要なコミュニケーションが違う点についてコメントしました。

二つ目のケースでは、都市緑地で行われたウォーキングイベントで男女 15 名がスズメバチに刺された事故について取り上げ、同様に「事実」「推測・判断」「対策や教訓」の順番で整理を行いました。

二つのケースで事故事例研究を行った上でのディスカッションでは、

・事実と推測を分ける、他所の事例を分析するのが勉強になった。
・怖いのは慣れ。時々意識を高めるのはいい。
・実際に事故にあわなくても自分ごとにできる

といった意見がありました。

今回は事故事例研究をテーマとしましたが、オンラインであれば各地の団体からヒヤリハットを持ち寄るといった方法もあります。今後のリーダートレーニング研究会の可能性にも話は及びました。

連　載

■LFC　現場に学び、互いに学ぶ半農小学生とおとなたち（１）

平 由以子（JCVN 理事／NPO 法人循環生活研究所/ローカルフードサイクリング㈱）

持続可能な食の循環を目指して運営しているローカルフードサイクリング（LFC）照葉の拠点として、住宅街の中にコミュニティガーデンがあります。そこでは生ごみをコンポストで野菜をつくる場所でもあり、住民に区画で菜園を約５０区画貸出しもしています。

もうひとつ、地域の実践的な環境教育の場としての役割も果たしています。目玉事業である、「半農小学生講座」では、①半年間で子どもたちが自宅で堆肥をつくる　②堆肥を持ち込み、土作りをする　③野菜づくりを学び育てる　④生き物や天気など学ぶ　⑤収穫して自宅で食べる　カリキュラムがあります。

年々、子どもに大人が学ぶケースが増えてきているように感じています。このプログラムは毎年実施し、小さなフィードバックを繰り返し、毎年全体を見直して更新しています。　その中でも、「⑤収穫して自宅で食べる」では、収穫した野菜をチームで分ける時間が一番見応えがあります。決められたルールはありません。因みに、わたしのチームの先月のわけかたは、収穫の時に気に入ったものを手放し、麻袋の上にサイズ順に並べて、じゃんけんをして、１つずつとっていく。でした。なんと人気は虫食い野菜（特に中に入ってそうな）や変に曲がったもの。サイズや美しい順という単純な方法ではなくならないのです。野菜の個性を認めて楽しんでいるようにも見えます。子ども

の織りなす案配や理不尽さなどとても勉強になります。

半年間、学年もバラバラのチームの中で、少しずつ関係性もできて、譲り合いや率直な意見がでることもあります。　カリキュラムや進行によっては、あっという間に終わる時間かもしれませんが、少し時間がかかります。予想以上に動き回るお子ちゃんがいる年は、楽しむまではいかない回も、もちろんあります。それも含む、見守るおとな同士でとフィードバックをするのが毎回楽しみなのです。何年経っても新しい発見があり、見直せる部分があるというのは NPO にとっては資産。その場を継続させていくことに全力を注いでいくことも大切な使命になります。

第１３回総会のご報告

志賀　壮史（JCVN 理事／NPO 法人グリーンシティ福岡理事）

NPO 法人日本環境保全ボランティアネットワークの第１３回通常総会をご報告いたします。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

１.開催日時　令和３年５月２７日１７～１８時

２.開催場所　オンライン会議ツール「zoom」を使用

３.正会員総数 11 名、出席した正会員数 9 名

（個人５名、団体３名、評決委任者１名）

４.審議事項

議案第１号 令和２年度事業報告および収支決算について

議案第２号 令和３年度事業計画および収支予算について

議案第３号 その他

５.議長・議事録署名人の選任

理事長 朝廣和夫より開会が宣言された後、定款第２６条に従い塚本竜也が議長に満場一致で

選任。また議事録署名人には朝廣和夫氏と平由以子氏が推薦・承認された。

６．定足数の確認

本総会は正会員総数１１名中、９名の出席により、定款第２７条に定める定足数を満たしており有効に成立した旨の報告があった。

７.議事の経過の要領及び議案別決議の結果

＜議案第１号について＞

資料をもとに令和２年度の事業および決算報告がなされた。監事 原愛子による監査の結果、事業及び会計が適正に行われている旨の報告が書面により行われた。以上を受け、第１号議案について採決したところ、全員一致で承認された。

＜議案第２号について＞

資料をもとに令和３年度事業計画及び収支予算の説明がなされ意見交換を行った。以上を受け、第２号議案について、一部修正を行った上で採決を行ったところ、全員一致で承認された。

＜議案第３号について＞

議長からその他の意見を求めたところ、年会費の見直しを求める指摘があり、今年度中に検討を行うことが、全員一致で承認された。

議長は、以上をもって本日の議案の審議を全て終了した旨を述べ、閉会を宣した。

お知らせ

イベント・ボランティア情報

●参加者募集！「アオサのお掃除大作戦! 2021」

生き物観察やアオサのミニ学習会もあります。
1回目：9/18（土）　14:00～16:00
2回目：10/24（日）　14:00～16:00
3回目：11/20（土）　14:00～16:00
集合場所：福岡市東区和白4丁目・和白干潟（海の広場） 主催：和白干潟保全のつどい （和白干潟を守る会、NPO法人循環生活研究所、ウェットランドフォーラム、福岡市港湾空港局他）
お問合せ：090-8412-2663（山之内)

●リーダートレーニング研究会2021 online

今年も、研究会をオンラインで10月、12月、2月頃に実施予定です。詳細は、Facebook等で告知しますので、ぜひ、ご参加ください。
https://www.facebook.com/jcvn.net

●JCVNの仲間を広く募集しています！

あなたの支援が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる環境保全活動をめざした団体のネットワークづくりの力になります。入会申込書をご送付いたしますので、事務局までお問い合わせください。JCVN理事をはじめ、環境保全活動の専門家のノウハウが詰まった会報が、年に3回お手元に届きます！また、メーリングリストでもJCVNが開催・協力するイベント情報等を随時ご案内いたします。活動への寄付も受け付けています。環境保全団体のネットワークづくり、リーダー育成支援のため、皆さまのご協力をお待ちしています！

・個人正会員（¥10,000／年）
・個人賛助会員（¥5,000／一口以上）
・団体正会員（¥20,000／年）
・団体賛助会員（¥10,000／一口以上）

［会費・寄付振込口座］

番号：０１７６０－９－１２２４０７

名称：日本環境保全ボランティアネットワーク

CONSERVATION VOLUNTEERS　２４
■発行日：2021年8月26日
■発行頻度：年3回
■発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）
■事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
tel/fax: 092-215-3966
e-mail: jcvn@greencity-f.org